

平成19年7月6日  
平塚湘南ロータリークラブ  
会 長 山口啓太郎

## 所 信 表 明

♪  
(時は戦国、梅雨<sup>つゆ</sup>の頃・・・) ポロンポロン ポロンポロン (琵琶の音)  
(相模の国では…田畑は荒廃し、人々は生きる望を失いかけていた！)  
ポロンポロン ポロンポロン ♪

・・・これは先の‘龍園’で行なわれた、決起会の寸劇“いざ出陣！”  
の出だしの台詞<sup>せりふ</sup>です。

皆さん、こんにちは・・・！

今年度、会長を務めさせて頂く、山口啓太郎です。

いよいよ新年度が始まりました。・・・真面目に、“いざ出陣！”です。

今年度は、CLPの長期目標を3年間と定めてスタートした、初年度にあたります。私の所信表明が少々長くなりますので、先に結論を申し上げます。  
『今、我がクラブ内の状況を考えますと、いろいろな奉仕プロジェクトを実施する前に、先ず、内部充実を図りたい、ということです。つまり、CLPの初めの年度として、「ロータリアンとしての意識改革」を図る必要があると思います。それにはもう一度初心<sup>たちかえり</sup>に発ち帰り、皆でRCを見直し、学習しましょうと言うことです。次の麻生年度は「We serveの試行の年度」と捉え、いくつかの奉仕活動を試行する年度と考えられます。そこで得られた経験を生かして、最後の中村年度は仕上げの年度で、CLPの「成果を収穫する年度」に位置づけたら如何か！？』と言うことです。

稲作で例えるなら、「代掻き<sup>しろかき</sup>（※1）や苗代作り<sup>なわしろづくり</sup>（※2）をして田植えの準備をする」のが今年度とするなら、「田植えや肥料を撒き、除草をして育てる」のが次の年度になります。最後の3年目は「たわわに実った稲を刈取り、豊作を祝う」年度と位置づけたいと思います。

簡単に言ってしまうと、以上がCLP導入の3ヶ年計画です。

(※1) トラクターや耕運機で水田を掘起し、苗を植えるための地均し作業

(※2) 苗床を作り、種もみを発芽させ、苗を10cm程度に育てる作業

さて、政治家でもなければ、大企業の社長でもない私が、人前で、こんなに長い卓話をする、ということは生れて初めてのことです。お聞き苦しいかも知れませんが、山口啓太郎が喋るしゃべるのではなく、平塚湘南 R C ( Rotary Club ) の会長が喋っているのだ、ということでお許し願います。

今年度、我がクラブは創立して 17 年目になります。我がクラブの状況ですが、創立時の会員数は 35 名です。今年度の現時点の会員数は 29 名です。現在、残っているチャーターメンバーは 13 名です。このうち重複もありますが、会長経験者 10 名、幹事経験者 6 名が在籍しています。チャーターメンバー以外では、会長経験者 2 名、幹事経験者 7 名です。前年度は 34 名でスタートしましたが、5 名減というかつてない減少ぶりになりました。スマイルの集まりも芳しくなく、このままでは奉仕活動へ影響が懸念されます。

### 【会員減少の要因】

会員数の減少は、様々な要因によって、変動しています。どうにも仕難い要因に、社会情勢の変化があります。この変化に対応できた経営者は立派です。反対に、変化に対応できなければ、R C どころではないでしょう。

私の業界を例に取ってみますと、お客様は、土木建設業界や不動産業界、更にその関連で金融機関、法務関係者などが挙げられます。また、官公庁も重要です。これらのお客様のうち、官公庁からの業務量の激減は、土木建設業界をはじめ、その関連業界である私の業界にも、大きく影響しています。これまで市内の産業として、大きなウエイトを占めていた土木建設業界や、その関連業界は、まさに社会情勢の変化に対応することを、いやおうな 否応無しに迫られています。この社会情勢の変化は、日本の社会全体の出来事であり、決して平塚市特有のものではありません。

恐らく途轍とてつもなくスケールの大きい、産業構造の転換期にあるのだと思います。ことによると、全世界や日本の政治経済の、大きなうねりの中で、我々がほんろう 翻弄されているのだ、と思います。

話を元に戻しますと、会員の減少の要因として、社会情勢を挙げましたが、これを外的要因とすれば、もう一方の要因として、内的要因が挙げられます。すなわちRC自身の中に、会員が減少する原因があるのではないかと、言うことです。この原因究明と、解決策を見つけ出さなければ、RCの明日はありません。

しかし、既に国際ロータリー（Rotary International ‘RI’）は、この問題を十分に認識して、全世界にRC再生の提案をしています。その提案がDLP（District Leadership Plan）でありCLP（Club Leadership Plan）です。

いずれにしても、実践するのは我々会員ですから、このクラブを生かすも殺すも、結果責任は我々自身にある、ということになります。

RIは活動し<sup>やすい</sup>環境造りのために、その手順や方法、そして活動するための目標作りの仕方まで提供しています。数多くの資料がRotary Japanのホームページ（HP）からDownloadできるようになっています。

これ等の資料は、各地区や各クラブで、活用するために提供されたものです。初めに申上げた、RCを学習するための、豊富な教材になります。

我がクラブはRIの一員である以上、その意向を尊重し、与えられた目標に向かって、クラブ運営を推進する必要があります。

### 〔私のRC意識の転機〕

ところで、私事ですが、3年前の平成16年10月の「市民なんでも相談会」の会場で、井出パスト会長から、副会長への薦めがありました。

RCと言うものの理解が足りない私にとって、当然に断りの理由を並べ立てたのですが、チャーターメンバーという宿命には勝てませんでした。単純なものです・・・！

しかし、どう言う訳かわかりませんが、会長へのベルトコンベアに乗ってしまっただけからは、RCを今まで以上に、必然的に意識するようになり、横山年度、井出年度、そして直前の杉山年度を、つぶさに観察するようになりました。そのために、例会にも殆んど出席するようになりました。自分でも本当に不思議に思います。

何と言っても一番大きな、私自身のR意識の節目は、昨年の10月3日に第8グループ内の会長、会長エレクト、副会長、幹事、そして副幹事を対象にしたCLPの勉強会でした。勉強会直後に、会長幹事をはじめ、参加した我がクラブのメンバー全員が、「CLPを導入すればクラブの運営が楽になるのだな」と感じました。周りからは、CLP導入は次年度からのことから、会長エレクトが動け！動け！と背中を押され、その気なった次第です。

ところが、CLP導入には総会決議を経てクラブ細則の改定をする必要がありました。CLPとは何か、を会員の皆さんに説明し、コンセンサスを図らなければなりません。

さあー、それからが大変！ 2ヶ月後の12/1の年次総会で、次年度の理事役員を決めなければなりません。定款でそのように定められているからです。

CLP導入を、それまで準備することは、到底不可能なことです。そこで年次総会で、「ウルトラC」を提案した訳です。ご存知の「CLP導入決議と次年度理事役員の選任を臨時総会に委ねる」という決議案でした。

2/16の臨時総会に向けて、CLPの理解のために資料を読み、「クラブ細則改定」の原案作りや、我がクラブに適応した「組織図」作りを、準備する必要がありました。

幸いにPETS（会長エレクト研修セミナー）の資料が手元に送られてきていましたので、年末年始の一週間の休暇を利用して、プールサイドの木陰に入り、寝そべりながら資料をじっくり読む時間が取れました。

大きな声では言えませんが、17年前にRCに入会して以来、初めて真面目にRCを勉強しました。

後回しになりましたが、CLPを導入するためには、長期目標を立てなければなりません。これだけはPETSの資料や、HPを探しても、どこにも参考例が見当たりません。地区の役員の方にもあたりましたが、そんなものは無い、と一蹴<sup>いっしゅう</sup>されてしまいました。仕方なく私なりに作文して、提案させて頂き、活動計画書に掲載させて頂いたことを、この場をお借りしてご報告致します。

## 〔ロータリアンとしての学習と意識改革〕

ところで、会長予定者は、私を含めて、多かれ少なかれ、RCについて学習しなければ、その務めを果たすことは出来ない訳です。

これから会長になることを予定されている会員は勿論、その他の会員もこのHPを活用されることをお奨めします。

会長エレクトには10月頃、PETSの資料が送られてきますから心配ありませんが、その他の会員には、これだけまとまった資料は、他にありませんので、是非、一読されることをお勧めします。

沢山ありますから、ご自分の役割の委員会だけでもいいと思います。

私は副会長に薦められる以前まで（つまり15年間）は、RCを薄らボンヤリ、耳から入る情報だけで捉えていました。だいたい、HPにこれだけ沢山の情報があることなど知りませんでした。

先輩ロータリアンから指導を受けるだけでは、いつまで経っても、RCの初歩から脱け出すことはできないと思います。

私は決して偉そうなことを言えるロータリアンではありませんが、偶然にも会長を経験させて頂く機会を得ましたので、<sup>いやおう</sup>否応なしにRCを学習しなければならない状況に置かれ、その経験から話をさせて頂きます。

よくあることですが、「例会に出席するのも億劫<sup>おっくう</sup>になり、欠席が続くと、更に出席し辛くなる」といった悪循環に陥ります。

誰もが、きっと一度は、経験されたことがあると思います・・・

この悪循環に陥る原因の大部分は、RCに対する学習不足、が原因だろうと思っています。悪循環を断ち切るためには、自分自身からRCを学習する努力が必要のようです。目から入る情報は確実であり、頭の中に残るものです。

会員皆が学習し、意識改革されれば、必然的に例会に出席するようになり、結果として会員増強や退会防止、そして様々な奉仕活動が活発になると思います。パスト会長だからRCは理解している、学習しなくてもいい、と言うものではないと思います。学習し続けなければ、意識改革など継続できる訳はないからです。

自分は奉仕活動が好きだ、何の抵抗もなく積極的に参加できる、RCは奉仕団体であり、学習の場等ではない、とお考えの方も居られると思います。このように考えて居られる方は立派です。

既に奉仕の心構えができているからでしょう。

しかし、「奉仕とは何か!？」といった疑問を持つ方も居られると思います。困った人々が大勢いれば、国家や国連があるではないか!

経営者や専門職として、職業奉仕をし、その結果、税金を納め、国家や国連を通じて、そのような困った人々や地域のために、貢献しているではないか・・・と考える会員が居られても不思議ではありません。

自分がそうでしたが、このような考えを持った会員に対して、RCの学習なしに、奉仕だ奉仕だと念仏を百篇唱え<sup>ひやくべんとなえ</sup>ても、それこそ馬の耳に念仏です。

すなわち、RC的ではない考え方の会員を「本当のロータリアンとして、意識改革して頂く」ように導くことが、RCの強化に繋がる<sup>つながる</sup>と思います。

### 〔充実した例会〕

意識改革とは別次元の話になりますが、私はクリスチャンではありませんので、間違っていたら訂正して下さい。

クリスチャンの方が毎週日曜日に、教会の礼拝に参加するのは、キリストの教えを拝聴<sup>はいちよう</sup>し、クリスチャンとしての、意識の確認や、意識の高揚のためではないかと思います。これは想像ですが・・・!

RCの例会は、いわばこの教会の礼拝と、大変似たようなところがあると思います。

毎回、「食事を取りながら、隣同士で会話をし、委員会報告を聞いて、その後、卓話を聞いてから解散」の繰返しですから、一番長い卓話の時間が、大変重要になります。

例会と移動時間を考えると、毎回2時間位を、例会のために捧げていることになります。出席者は全員、経営者や専門職の方ばかりですので、この貴重な時間が、退屈な例会であれば、苦痛になるのは当然です。また、そのようであるなら、大変失礼なことになります。

自分は何のために、RCの例会に参加しているのか、と疑問を抱かせるような例会であってはならないと思います。

だからこそ「魅力ある例会」の企画が必要になるのです。

プログラム委員会の役割は、非常に重要になって参ります。

## 〔 I serve / We serve の奉仕活動 〕

次に、R Cの本来の任務である、奉仕活動について、少し話してみたいと思います。

言うまでもなく、R Cの活動はすべて、何等かの奉仕活動に当てはまる訳ですが、特に職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕について考えてみたいと思います。勿論、この中にはR財団と米山奨学会も含まれます。

先程も言いましたが、「奉仕とは何か!？」このような疑問を抱いた経験は誰にもあると思います。

以前、I serve だの We serve だのといった論争があって、結果的には両方必要であるという結論になったように記憶しています。

これからお話しすることは、私自身の考えだけではなく、知識の切売りになりませんが、奉仕活動する上で、参考になればと思います。

新しい会員もおられますので、パスト会長にとっては、少々退屈になりませんが、お許し下さい。

『 I serve を直訳すれば「私が奉仕する」、

We serve を直訳すれば「私達が奉仕する」 』となります。

たとえば、「市民なんでも相談会」は、皆のノウハウを結集しなければ成り立たない、奉仕活動です。個々の会員にとってみれば、I serveの職業奉仕活動ですが、プロジェクト全体で見れば、We serveの社会奉仕活動になります。会員皆が集まって、市民のためになる奉仕活動は、達成感が湧くと共に、連帯意識が芽生えます。これがWe serveのいいところです。

We serve とは‘**皆が集まって、奉仕を实践する**’ことです。

一方、国際奉仕のように、様々なプログラムが、R財団から提供されています。青少年交換やG S E（研究グループ交換）等のように、直接奉仕するプログラムもありますが、その他の多くのプログラムは、遠く離れていて、我々が直接奉仕することは不可能です。

その活動内容は「ロータリーの友」やHPから知るだけです。つまり、国際奉仕は‘**観念的に行なう奉仕**’であり、具体的には寄付金を納めることによって達成されます。これもI serveということになります。

遠慮のない発言を許して頂けるのならば、私が資料を読んでいく中で感じた R I の考え方は、次のようなものです。

『 We serve は各クラブの活性化のために、是非必要である。その成果として「達成感や連帯意識」が芽生え、 I serve がスムーズに機能するようになる！』・・・つまり国際奉仕への参加が、言い換えれば R 財団への寄付金が、スムーズに集まる事を願っている訳です。こうして世界各地から集まった巨額の寄付金が、国際奉仕活動に活用され訳です。奉仕活動にも **位置付けがある** ことを、理解しておく必要があると思います。

このように奉仕活動について、分析してみますと、クラブ内で行なう We serve は「**達成感や連帯意識**」を促すこと、が目的であることが分かります。

無理をした奉仕活動をいくら企画しても、多くの会員が「**心情的に**」参加しなければ、 We serve の意義が失われてしまいます。また、無理をした奉仕活動は、次第に会員の参加も少なくなり、毎年実施するわけにはいきません。

現在、我がクラブの We serve の典型は、「市民なんでも相談会」です。会員皆が無理をせず、自然体で奉仕活動が行なわれ、その結果が市民の方々に貢献している、非常に理想的な奉仕活動の形態です。

長期目標にも掲げられていますが、このような We serve を、年に 2 回、定期的に実施できるようになれば、期の前半と後半で、「達成感や連帯意識」の高揚を図れる機会ができますので、クラブ内の なかだるみ 中弛み が解消されると思います。

次年度と言わず、できるだけ早い時期に、このような We serve を企画して、息の長い We serve で、活力あるクラブが維持できるように、改革できることを願っています。



## 【 R I のテーマ ‘Rotary shares’ 】

最後になりましたが、今年度の R I のテーマは「ロータリーは分かちあいの心」だそうです。毎年度、R I 会長からメッセージが発表されます。

いつもそのメッセージを聞いて感じることは、あたり前のことですが、ロータリアンに対して、その目標を達成することを、鼓舞した内容になっています。私が会長になって、今年度の R I のテーマを聞いたとき、大変共鳴するものを感じました。

「分かちあいの心」の意味は、ひとつには「ロータリーの奉仕の心を広く社会に分かち広めること」、もうひとつが「ロータリアン同士が持っている知恵や資源を分かちあい、ロータリー活動に取り組むこと」と理解しました。

会員各自が持っている知恵や資源を提供し合う以外に、ロータリー活動はあり得ません。各自が‘出来る範囲’で活動する訳ですが、結果的に、なにも出来ませんでした、ではロータリー活動になりません。

各自が‘出来る範囲で’と言う意味は、出来なければ何もしなくていい、と言うことではありません。他の会員がその任務を肩代わりするようなことは、無くしたいものです。

会員皆が経営者であり、専門職の方々です。限られた会員だけの活動では限界がきます。与えられた任務を少しでも達成できるよう、各自の知恵や資源を出し合って、ロータリアンとしての役割を果たして頂くことを切に願います。

これから 1 年間、皆様のご指導、ご鞭撻ならびにご協力の程、よろしく願います。

長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。